



Title	中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究：＜限界性＞の観点から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	楊, 安娜
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12515号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65455">http://hdl.handle.net/2115/65455</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yang_Anna_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 楊 安 娜

主査 准教授 松江 崇  
審査委員 副査 教授 武田 雅哉  
副査 特任教授 津曲 敏郎

## 学位論文題名

中国語の結果補語構造における下位カテゴリーの研究——〈限界性〉の観点から——

本論文は、中国語における基本的な統語構造の一つである VR 構造（「動詞—結果補語」構造）を考察対象として、VR 構造が〈限界性〉——動作行為の時間軸上の内的展開における限界点の明確度——の異なる複数の下位カテゴリーからなるという仮説を提出した上で、従来未解決であった種々の文法現象の解明を目論んだものである。中国語の VR 構造に関する先行研究は膨大な数に上り、そこで扱われてきた問題も、R を担う動詞・形容詞の統語的・機能論的特徴といった内部構造に関するものから、構造全体が有する〈使役性〉の由来の問題など多岐にわたる。先行研究のなかにも、個別の文法現象を論ずる際に VR 構造の内的差異に着眼した研究も存在するものの、本論文のように複数の文法現象を説明し得る VR 構造の下位カテゴリーを具体的に提示した研究は稀少であった。

本論文は、〈限界性〉という意味要素の中国語文法体系における重要性を踏まえつつ、〈限界性〉の程度とその付与方法が異なる 5 類の下位カテゴリーを仮定した上で、①VR 構造が従属節に生起する場合における動詞接尾辞“了”との共起条件、②VR 構造が主節を担った動詞コピー構文に生起する条件、③〈完成相〉を表す VR 構造である“V 完”、“V 过<sub>1</sub>”（〈経験〉を表す“V 过”ではない結果補語の“V 过”）、“V 好”の選択条件、④“V 到”構造と副詞“正”“正在”“在”との共起条件、といった文法現象について議論を展開し、これらの現象には〈限界性〉の程度とその付与方法の違いとが関与しており、等しく VR 構造に属するものであっても、下位カテゴリーによって文法的な振る舞いが異なることを指摘し、VR 構造の内部に如上の下位カテゴリーの存在を仮定することの有効性を主張するものである。

本論文の主たる研究成果は、以下の三点に要約できる。

第一点は、中国語文法体系の中において〈限界性〉という意味要素が、VR 構造および VR 構造に関わる文法現象と、具体的にどのように関わっているのかを明らかにしたことである。VR 構造の R が一定の〈限界性〉を付与する統語成分であることは周知のことであり、この構造と〈限界性〉とが何らかの関連性を持つこと自体は自明のことであるが、VR 構造に〈限界性〉の程度とその付与方法とを異にする下位カテゴリーの存在を仮定した上で、カテゴリーごとに異なった文法的な振る舞いが見出されることを指摘した点は、本論文の重要な研究成果と言える。

第二点は、今後、VR 構造に関わる未解明の文法現象を研究していく際に解明の手掛かりとなり得る

カテゴリーを提示したことである。本論文で提示された VR 構造の下位カテゴリーは、複数の文法現象を解釈するのに有効であり、普遍性の高い分類であると予想される。この下位カテゴリーと深く関わる文法現象が、他にも少なからず存在する蓋然性は大きい。

第三点は、〈限界性〉の観点から文法現象を検討していくなかで、従来、定説のなかった問題に対して有力な仮説を提出していることである。具体的には、動詞コピー構文の構文的意味、“V 完”“V 过<sub>1</sub>”“V 好”の生起条件の違い、“V 到”構造と方向補語構造の機能差異といった問題について独自の仮説を提出している。このうち動詞コピー構文の構文的意味の解明はとりわけ注目に値する。動詞コピー構文は、述語動詞句の種類によって多様な意味を表し得るため、その構文的意味の解明が困難であり、定説は未だ存在しないと言ってよい。本論文は、当該構文に生起し得る述語動詞句を形式・機能の両面から詳細に分類・検討した上で、動作行為の〈多量性〉という観点から、多様な意味を表す動詞コピー構文全体を包括的に説明し得る構文的意味を提示している。

本論文は、膨大な先行研究を慎重に検討した上で、根拠となる言語学的事実を丁寧に示しながら上述の研究成果をあげており、一定の信頼性を備えたものであると評価される。その一方で、審査の過程においては、VR 構造の定義やその範囲の規定についての論述が不十分であること、章の構成や用例出典の提示方法などの形式面において必ずしも適切でない箇所がみられること、日本語表現に改善の余地のある箇所が散見されることなどが指摘された。しかしながら、これらの問題は、上述の研究成果を覆し得るものではないと判断される。

なお、本論文の内容は、日本中国語学会全国大会等での口頭発表および三本の既刊論文に基づくものであり、本論文の核心部分の内容は査読付き全国誌に掲載済みである（『中国語文法研究』2016 年巻（通巻第 5 期））。